湖と文学

鳥居省三

自然はみな美しいが、ただ絵のように美しいだけでなく、人間が忘れていた何かを強く感じさせる、そういうところには決まって文学がある。それは文学でなくともいい、絵画や音楽も同じことだが、人間が忘れていた何かとは、西洋にすべての典型を求めた近代人にとって、それは理屈で割切るわけにはいかない〝故郷〟の臭いであり〝ふるさと〟であろう。明治三十年代から日本の知識人が北海道に多く旅を志したのは、一つは社会経済的な野心と、未知の世界への好奇心であったことは事実だが、一つは既にして都会に疲れた心の栄養を求めての放浪であったと見ていい。

文学者に限らず、これらを動機とした来道知識人たちは、まずその自然が原始のままであることに驚き、そこに日本人の〝ふるさと〟の何かを感じて、最高級の讃辞を盡くして文章や絵に残した。独歩や桂月のように、更に遡って武四郎のように、純一に自然だけを描いたこの古典的な作品群を、北海道は大事にしなければならないと考えている。

ところで、これらの作家たちの残した北海道の作品に共通しているのは、川と湖であろう。農民文学とか海洋文学、あるいは山岳文学というような呼称がどこかにあるようだが、湖沼文学という呼称があるのかどうか、勿論なくとも構わないが、これらの作家たちが湖沼に多く眼を止めたことは注意していいかも知れない。大正期から昭和戦前に来道、あるいは在住した作家たちにも、湖沼を素材にした作品が比較的多いのは何故だろうか。〝湖と文学〟という題を与えられたからというわけでもないが、記憶に残っている作品に北海道の湖が登場しているのが多いことは事実なのである。

幾つかの理由が考えられよう。一つは北海道の自然を語るのに湖が中心になる場合が多いことは周知の通りで、単純なことだが北海道に湖が多いことがあげられよう。しかもその湖が、開発が遅れたこともあって周辺の状況から比較的原始の姿をとどめており、それが人工の都会に疲れた人たちの眼に安らぎを与えるからであろう。それは想像するだけでも或る種のロマンを呼ばずにはいられないだろう。更に北海道全体が、経済的にも文化的にも着目され、注目を浴びるようになった大正中期以降（国公立公園として指定されるようになったのはこのころからであろう）、北海道出身の作家たちが、文学史的にいえばいろいろの理由はあるが、郷土の自然に注意を向けるようになったからで、旅行者の眼としてでなく自然保護の思想も含めて、関心を深くしたからではないだろうか。私の知る限りでいえば、北海道の郷土史研究というようなことが行政サイドでも真面目に語られるようになったのは、明治末期からであり、第一次〝地方の時代〟はこのころからはじまったとみていい。

もう一つ、北海道の湖沼全体について私は知るところ多くないから何ともいえないが、道東地方でいえば、すべての点で更科源蔵氏の存在が大きいと思う。かつて更科氏が、どこかで摩周湖について、二百回以上も見ているが詩にすることができないのだ、と語っている様子を小説の中で見たことがあるが、それは旅行者の感懐ではなくて、摩周湖そのものが氏のなかで血肉化していることを証明しているだろう。氏の周辺にあって、屈斜路湖とか阿寒湖、摩周湖、塘路湖、そして釧路川などは、切離して考えることのできない、生存条件そのものであったといっていいのではないだろうか。

ところで文学作品に登場する湖は（これも私は道東地方のことしか知らないのだが）、旅行者の紀行文的作品、随想、あるいは小説の背景として描かれているのが多いのであるが、小さな表現や部分的な記述をあげればきりがないのは木原直彦氏『北海道文学散歩』（道東篇）を見てもわかる通りで、いまここで、それでもなお、作家の思想とか文学の本質にかかわる形で表現されてい

る作品についていえば、歴史的に私は次の五篇をあげておきたい。

中戸川吉二「犬に顔なめられる」(大八)は、自身と思われる主人公が春採湖で自殺未遂をし、犬に顔をなめられて眠るというふうに、いわば大正期デカダンの代表のような作品である。春採湖について詳細な描写をしているわけではないが、旅行者のようにわざとらしく、いかにも誇張して湖を描写していないところがかえって原始的であり、昭和九年に林芙美子が摩周湖を巡って釧路に宿をとり、春採湖を見て「摩周湖や屈斜路湖と違って、ひどくアイヌ的で、ひなびて賑やかな湖であった」と書いた観察が、そのまま小説の背景になっているという感じなのである。春採湖は海跡湖であり、従って阿寒湖や屈斜路湖のような雄大な展望を持った湖ではないが、それだけに平凡で、平坦で、庶民的な湖ということができる。摩周湖などはあとでもふれるが、人を寄せつけない厳しい美しさが売物であろう。しかも春採湖はどこか人間臭い。林芙美子が「アイヌ的で、ひなびて賑やかな」と表現したのは、そのことを直覚的に感じとったからであったろうが、余り過去の文学のうえで扱われたことのない春採湖は、そういう意味で文学に登場していい湖だと思っている。

中戸川吉二は釧路出身の作家である。少年時代を釧路で過ごしたから、東京に出て芥川龍之介や菊池寛ら〝新思潮〟の仲間と交って派手な都会の生活を体験してはいたが、根は素朴な田舎の自然人をどこかに持っていたので、「兄弟とピストル泥棒」(大八)のような都会の少年ふうな人物を主人公にした小説も書いているが、自然主義の作家らしい素直な一面がある。そういう中戸川から見れば、春採湖は特別に驚くような湖ではない。いわば生活の一部といっていい。摩周湖で自殺未遂をすれば話題であろうが、春採湖では道楽息子の茶番劇でしかない。だからあえて、事実と思えるその事件を自然主義ふうに構成したこの小説が、かえって春採湖というものを親しみのある庶民の湖として際立たせるのである。これは春採湖についてよく知っている私だから、そういえるのかも知れないが、春採湖にはそういう表情があるので、まさしく林芙美子の直感はすぐれていたのである。

その林芙美子の「摩周湖紀行」(昭一〇)は、戦前の文学作品に描かれた摩周湖の表情としては抜群といっていいかも知れない。誰でもが引用するところだが、次の文章は、単に紀行文の一節とか、小説の背景説明というようなものでなく、林芙美子という作家の個性と眼とがとらえた厳しい観察で、感覚的にすぐれているだけでなく、どこかで科学的でさえあり、豊かな想像力を思わせる。

「摩周山は海抜三百五十米位で、湖の深さは二百米ばかりあるとか聞いた。摩周山の中腹から見える湖の姿はまるでぽつんと鏡を置いたやうであった。この鏡のやうな湖心にはカムイシュといふ黒子のやうな島があり、まるで浮いているやうであった。去来する雲の姿が露西亜の映画のやうに明るく見えて、波一つない静けさである。湖の向うには摩周の剣のやうな頂上が雲の中へ隠れてゐるやうに見えた。湖岸は降りてゆくにむづかしい絶壁で、遠くはるか地底に眺める湖だけに暗く秀でてゐた。紅鱒やザリガニを放ってあると云ふことだったが、あんまり波がないので、死んだ湖のやうにも見える。足元は熊笹と白樺の若木で、風が下から吹きあげて来た。此辺いったいを阿寒地帯といって、私の立ってゐる熊笹の丘から雌雄の阿寒岳の峰や、斜里岳、標津の重なった山の姿がパノラマのやうに眼に這入って来る。」

「私は北海道へ来て、興味を持ってゐる湖はこの摩周と、帯広の奥の然別湖であった。摩周湖は自分の空想した湖よりも神々しかった。渚に人を寄せつけない孤立した湖だけに、地味で雄大であった。晴れ間に姿を現はしてゐる間はまことに束の間で、何時も霧か雲で姿を隠してゐると云ふことである。」

林芙美子が〝北海道の旅より〟と題した一連の紀行シリーズでこれを書いたのは昭和十年六月(発表)であるが、実際に摩周湖を見たのは前年の昭和九年六月、三十一才のときである。過去形で書かれた(紀行文はみなそうであろうが)この文学は、一年前に見た印象と記憶が鮮烈に眼に焼きついているようで、しかも個々の観察も極めて正確といっていい。ここでは〝神々しかった〟とか〝人を寄せつけない〟とか〝地味で雄大〟というような誰でもいうようなロマンチックな形容が、決して浮いていなく、文章全体がそういう言い方に真実味を与えている。写実の中に詩情を精髄とした、いかにも女流作家林芙美子らしい文章といっていいが、この作家にそういう詩情を強烈に湧かせた摩周湖は、また逆にこういう作家によって浮上の機会が与えられたといえなくもない。何とも表現することのできない、そういうものを文学は表現するのであろう。数ある摩周紀行の中でも、私の最も好きな文章である。かなり主観的な表現

であるが、同じ昭和九年夏に摩周湖を訪れた随筆家の河田楨の紀行文「国立公園一周記」(昭一六)の中の、摩周湖の描写もいい。

ところで〝湖と文学〟ということが話題になるのは、むろん作品をおいてほかにないことであるが、最大の要素は〝湖と作家〟であって、作家がそのことによって思想的にとまではいえないにしても、精神的に何らかの変容を迫られたことであり、あるいは変容、自己改造を求めて湖を探したという関係をそこに見ることであろう。それはひょっとすると人間が複雑なメカニズムのなかで何か大事なことを失い、あるいは忘れかけていたことに気がついて、怖ろしい孤独に見舞われた、或いは激しい怒りを覚えたことと関係しているであろう。

作家八木義徳氏は昭和二十四年に「十七年振りの帰郷の旅」で北海道遍歴をはじめ、夏に摩周湖を訪れた。主人公矢田の口を借りれば「飄然とこの家へまぎれこんで来た旅の風来坊にすぎない」が、しかし内実は「彼の肉体も精神もいまはどうやら故郷の野性的な風土に適合しつつ」あって、「しかも、何よりもまずこの旅は、彼の『失われた野性』の復活のために始められたもの」であったのである。敗戦直後の昭和二十四年、まだ混乱の続いているなかで、孤独か怒りかわからないが、人間として健康な精神の回復を願う三十八才の作家が、〝失われた野性〟にせよ何にせよ、自ら何かを求めて摩周湖を訪れたという動機を、当時の日本の社会背景の中からみて、私は大事にしたいと思う。

津軽海峡を航行中の青函連絡船の三等船室で、矢田は奇妙な画家に逢う。その画家は、ここ十年来、摩周の絵ばかり描いて展覧会に出すが、一度も入選していない。「通らないのは当り前です。あたしはまだあの湖の魂を摑んでいないのですからな」といいながら、美しく描きすぎている当代の著名な画家の名をあげて、「しかしあの湖は決して美しい湖ではありません。恐ろしい湖なんです。ですから美しく描いてはウソなんですな」という。そして矢田は、その画家のいう「あの湖を〝絵〟にしようと思うからいけないんで……絵にしようと思う前にあれと一緒に暮らしてみよう……」と告白した言葉に「文句なく……感動した」のであった。

しかし実際に作品「摩周湖」(昭二五・八)は、画家が〝絵〟にしてはならないと告白したような意味で、つまりその思想で貫かれたすぐれた小説作品であり、ほかに登場する「沢井さん」や「摩周を見て死ね!」と叫ぶ弟子屈に住む詩人蓼科氏も含めて、氏はたしかに〝失われた野性〟の回復を遂げたといえるだろう。すこし長いが、八木氏が観察した摩周湖の描写と、氏自身のなかで明らかに変容を遂げてゆく精神の微妙な揺れを次の引用文に感じとりたいと思う。

「矢田は展望台の上で、この凄じい霧の交響楽に啞然と目を奪われていた。脚が竦み、軀が硬直し、呼吸ができなかった。するとこの時、眼前の厚い霧の幕がふいに裾からさーっと大きく二つに裂けた。とみる間に、その裂け目から暗藍色の湖面がちらりと顔をのぞかせた。彼は思わずあッと叫んで、危うく手近の白樺の太い幹に両手で抱きついた。はるか眼下に見下す湖面と彼の立つ位置との思いもかけぬ距離が、急激な恐怖感となって本能的な防衛措置を彼にとらせたのだった。

しかし霧は湖面から急速に晴れ上って、きた。そして摩周はついにその神秘な姿を現わしたのだった。矢田は白樺の太い幹から用心の片手を離さず、二五〇メートルの懸崖の尖端からのめりこむような姿勢で深々と湖面をのぞき込んだ。

「む!」

彼は、背後からいきなり首を絞められた人間のような声を出した。摩周の色が彼を驚かせたのだ。何という不思議な色だ、この色は! 奇怪なまでに透明で、神秘なまでに深く、そして無気味なまでに濃いこの暗藍色! こんな色はまだ一度も見たことがない。ひきずり込まれそうな魔力だ。しかも惻々とした鬼気さえそこから這い上ってくるではないか——危険な断崖の突端で、矢田の両脚はぶるぶると細かく震えてきた。そして彼は摑まった白樺の太い胴からずるずると手をすべらせると、そのまま意気地なくもその場へ坐りこんでしまった。恐怖から腰が立たなくなったのだ。坐ったまま彼は強いて眼を瞑じた。その恐怖から逃れでもするかのように。」

「廓寥としていた。森閑としていた。ただ静かであった。動くもの、音立てるもの、乱すものは何もなかった。原始の裸形と太古の沈黙だけがあった。完璧な古代自然がそこにあった。がしかし、この絶対的な静寂に面した時、瞬間彼はシンバルの一打が耳朶で鳴るのをきいた。それは明らかに音楽的な衝激だった。それは彼をハッキリと意識した。

或る厳粛な陶酔感が彼を緊縛した。彼は呼吸すらも忘れていた。

が、厳粛な陶酔感は、やがて或る不安な恐怖感に変りはじめた。

そうして、それはさらに三転して、な

にやら胸苦しい罪の意識に変って行った。」

林芙美子の心の動揺を押さえた冷静な眼と、八木氏の感動を体いっぱいであらわした躍動的表現――その心の内部の変りゆく様子、まさに動と静との対蹠的文章であるといえないだろうか。そして少なくとも摩周湖と人間とのかかわりを描いた傑作といっていいだろう。

武田泰淳の「森と湖のまつり」(昭三〇～三三)で有名になったのは塘路湖であるが、周辺の小沼沢も含めて海跡湖である。泰淳のこの小説は、人間の存在、行動を〝祭り〟としてとらえる意図があったのではないかと私は思うのであるが、小説の時間の流れ、混血児、アイヌの儀式、それらの素材が、どこか滔々として果てもなく流れているという感じである。塘路湖に関する細かい描写は随所に出てくるが、全体としていえば小説の地理的背景として描かれているだけで、泰淳にとって湖を描くという主目的はない。従って表現も、そのことによって小説に重大な影響を与えてはおらず、一つの風景を描いているにとどまっているという感じである。泰淳にとって重要なのは風景ではなくて、あるいは風景によって人の心が動いてゆくことではなくて、人間の存在そのものへの関心であった。従って塘路湖を描いた次のような文章も、細かい観察と絵画ふうな描写とで美しいが、あくまでも知識であり、客観的であって、人がのめり込むようなことにはなっていない。

「炉部屋から見わたせる湖は、ベカンベの葉でおおわれていた。それは印象派画家モネエの『水蓮』を想わせる、一幅の油絵だった。ただモネエの絵では、水面を飾る青も紫もコバルトも白も、もっと明るく楽しげだった。額ぶちで区切られた四角の中に、微妙な光の作用が、ちょうど快感をさそうに必要なだけ、あつめられ、試験されてあった。額ぶちのないトウロ湖は、陰気な青黒さにつつまれ、不安定なひろがりを持っていた。そのちがいは、池の水蓮と湖のベカンベ、知りつくされた『自然』と、まだ絵筆のふれていない自然とのちがいでもあった。」

さて、かつて更科源蔵氏が摩周湖を詩にすることができないと発言していたことを私はとても気になるのだが、その氏が昭和十三年「摩周湖」という詩を書いている。紙数の関係で全文を紹介できないのが残念であるが、湖そのものから自然のイメージを湧かせたというものでなく、その背景にアイヌ伝説という大きな関心事がある。これは、氏におけるアイヌへのヒューマンな思いやりが思想としてあるからで、おそらくこのような詩を湖に托して書くことができるのは、同氏をおいていないであろう。藤原　定、北園克衛にも摩周湖の詩があるし、短歌や俳句などの作品に至っては数えきれないほどあるにちがいないが、更科氏の作品は、そういう意味でも極めて特殊なものといっていいのではないだろうか。

ところで釧路地方に広がる二万ヘクタールといわれている広大な湿原は、大きな湖と考えておかしくはないのではないか。私は毎週、仕事の関係で釧網線に乗るが、窓から眺めていると、まるで大きな湖の岸を一時間もかけて車で巡っているというような感じに襲われることがある。三千年前までは古釧路湾と名づけられる入江で、鉄道の走っている山の縁まで海であったと地質の先生の報告にあるが、海というよりは湖といったほうがふさわしいと、対岸の山脈を見ながら思う。塘路湖と、周辺の小湖沼とを結びつけて考えると、いっそうその感が強い。

釧路湿原が自然保護の問題で話題が大きくなってから久しいが、湿原を守るためには周辺の小河川に手を入れるなという自然保護関係者の意見もずいぶん聞いた。それはその通りであろう。かつて湿原問題の座談会かに出席して、要するに自然を保護の名において様々な対策を考えるよりは、神の住んでいるところ、聖なるところ、サンクチュアリとして、人間が手をふれてはいけないところ、恐ろしいところ、というふうに考えるべきだという意見を聞いて、成程と思ったものである。

既に見たように、湖についていえば、文学としてすぐれた作品はみな、或る神々しさと、恐ろしさと、敬虔な姿勢とで対したし、それが作家の精神の変容にもつながっていた。これらの作品のどこに、最初から観光の色彩があったか、或いは単なる気ままな旅行者の紀行的感覚で書かれていたか、そして科学で解明されれば足りるという思想があったか。

私は湖に限らず、自然と人間との関係は、基本的にそういうものであろうと思う。湖にかかわるアイヌ伝説は、そういう意味で最もすぐれた文学といってよくはないだろうか。

(釧路短期大学教授、「北海文学」主宰)